

ひょうごの遺跡

姿をみせた古代人の祈り

— 出石町 砂入・袴狭・入佐川遺跡特集 —

出石郡出石町の砂入遺跡や袴狭遺跡などから、数万点に及ぶ木製祭祀具などがみつきり全国最大の祭祀遺跡として注目されています。

この発掘調査は、建設省が行う小野川放水路建設事業に先立って、兵庫県教育委員会が昭和62年度から進めているもので、遺跡は袴狭地区を中心とした、古代但馬国もしくは出石郡の役所跡とそれに伴う祭祀跡と考える説

が有力となってきました。

遺跡は出石町北部の丘陵に挟まれた谷間にあります。ここには、小野川、袴狭川、入佐川の小さな川が流れており、川の流域ごとに砂入遺跡（小野川）、袴狭遺跡、入佐川遺跡と名付けました。これらの遺跡は、それぞれ異なった特色があります。それでは、遺跡ごとに発掘調査の成果を紹介しましょう。



写真1 空からみた砂入・袴狭遺跡と出土した人形の顔

日本最大の祭祀跡

すないり
……砂入遺跡……

砂入遺跡からは、奈良時代～平安時代の祭祀に使われた木製品が大量に出土しました。これまでに出土した木製祭祀具の総数は数万点にもものぼっていますが、これは全国で出土している総点数を上回り、全国で最大規模の祭祀遺跡であることが分かってきました。

ところで、古代には朝廷を中心にさまざまな祭祀が行われましたが、災いを祓い流す儀式として代表的なものが「祓」と呼ばれるものです。「祓」には短冊状の板を削って人の形にした人形を用い、これに息を吹きかけたり、なでたりして罪や汚れを移し、身を清めたあと川に流しました。人形以外では馬の形をした馬形や串状の齋串の他に、舟や鋤、刀など様々な形を模した木製祭祀具が使われました。現在でも、これと似た風習が各地に残っており、流し雛などもこの流れをくむものと考えられます。

砂入遺跡では、「砂入」という名前が示しており、洪水によって運ばれた砂や粘土が幾重にも重なっていましたが、これによって奈良時代～平安時代の地表面がうまく上下に分けられており、人形や馬形などを流した状況がそれぞれ非常に良く保存されていました。

上層にあたる平安時代の地表面では小枝を敷き詰めて作られた「道」が見つかりました（写真3）。この道の幅は2.5mほどで、軟弱な粘土の地盤の上に作られているため、道の両脇には杭を打ち込み、杭と杭をつなぐように太い枝を置いて路肩が崩れないようにしっかりと固定されていました。また、人が歩く部分には、小枝の束を厚く敷き詰め、束が動かないように間に杭を打ち込み太い枝を横に渡すという念の入れようです。おそらく、貴族や役人たちが「祓」を行う場所までこの道を通い、また、この道の上で「祓」を行ったことでしょう（写真2）。



写真2 「祓」の儀式的向かう様子の想像図
このように道を通ったのでしょうか



写真3 小枝を敷きつめた道



写真4 一束にして置かれた人形

下層にあたる奈良時代の地表面からは数本の溝が発見されましたが、溝の中や溝と溝に挟まれた畔状^{あぜ}のところからは、おびただしい数の人形や馬形、斎串などの祭祀具が出土しています(写真5)。溝の縁には、大きさや形の揃った人形や斎串が、ひとまとめに頭を下にして置かれていました(写真4)。また、人形の足を地面に突き立てたものもありました。

砂入遺跡では、「祓」の方法やそれに用いる木製祭祀具の種類や形、大きさなどが時代によって変化していることなどがうかがえ、古代の祭祀の実態が明らかとなりつつあります。



写真5 溝の中には多量の木製祭祀具が残されていました。



写真6 さまざまな祭祀具

古代の役所跡（但馬国庁？出石郡衙？）

はかぎ
……袴狭遺跡……

袴狭周辺の谷部分には広範囲に水田や川の跡が埋もれています。ここでも、砂入遺跡と同様に人形や馬形など多量の木製祭祀具が発見されています。これらの遺物は川の上流から流れてきたものであり、「福」？の文字が浮き彫りにされた銅製の印（写真10左上）も発見されたことから、上流部に大規模な公的施設があると予想されていました。

平成4年度に出石町教育委員会が発掘調査したところ、平安時代の建物跡が見つかりました。背後に此隅山が迫った手狭な場所ながら、溝を巡らせた3棟の建物跡や板で護岸をした水路が発見されたのです（写真7）。

これらの建物のうちの1棟は礎石の上に柱を建てる立派なもので、礎石には直径50cmほどの花崗岩や玄武岩が利用されていました。

また、水路は幅2.2m深さ50cmあり、護岸には幅20cmほどの矢板が隙間なく立てられ、これと50cm間隔に打たれた杭との間に長い横板

を挟み込みたいへんていねいに造られていました（写真8）。

建物の周辺や水路などからはたくさんの遺物が出土しています。下級貴族や役人が帯（革製のベルト）につけた石帯（石の飾り、写真10左中）、「調布」「史生」など役所に関係するような文字の書かれた木簡、黒漆塗りの鐙、「泰」などの文字の見える墨書土器（写真10左下）、硯、それに人形、馬形をはじめとする木製祭祀具など一般庶民の集落では使われない特殊なものがたくさん出土しています。また、琵琶（楽器、写真10右）が全国で初めて出土して注目されました。

また、砂入遺跡の約1km上流にさかのぼったところで発見された荒木遺跡でも、出石町教育委員会の発掘調査で、8世紀～9世紀頃（奈良時代～平安時代）の掘立柱建物跡がみつかりました（写真9）。



写真7 袴狭遺跡の礎石建物跡（石の上に柱をのせます。出石町教委提供）



写真8 ていねいに木を組んだ溝（出石町教委提供）



写真9 荒木遺跡の掘立柱建物跡（地面に穴を掘って柱を立てます。出石町教委提供）



写真10 袴狭遺跡のおもな出土品

建物の柱穴には一辺が1mを越える大きな方形のものがあり、真ん中には柱を抜き取った跡もはっきり残っていました。柱穴の並び方から建物の規模を復元すると、最も大きなものでは9.5m（5間）×5.6m（3間）もありました。

これらの建物は、一定の方向を基準に建ち並んでおり、建て替えを行いながら10棟ほどが建っていたようです。

袴狭遺跡や荒木遺跡で発見された様々な遺物は、役所などの公的施設で使われたと考えられるものがたくさんあることから、立派な建物は役所などの施設の一部であったと考えられます。

では、どのような種類の役所があったのでしょうか。

一つの考えは第1次但馬国庁説です。『日本後紀』によれば、但馬国を治める役所（但馬国庁、今の県庁のようなもの）は804年に移転されたと記されています。移転後の国庁は日高町内にあったと推定されていますが、移転前の所在地はこれまでよく分かっていませんでした。

また、この他にも出石郡の役所（郡衙^{ぐんが}）ではないかと考える意見や、皇族や貴族の私有地を治める施設、もしくは地方豪族の館ではないかなどいろいろな意見があり、答は簡単には出せそうにありません。

入佐川遺跡からは古墳時代～平安時代の川の跡や水田跡が発見されました。これらは、当時の土木工事や農作業の様子がうかがえる興味深いものです。

古墳時代の堤防からは素焼きの壺・甕・高杯などがほぼ完全な形でたくさん出土しました(写真11)。この堤防を挟んで、北側には水路が、南側には旧出石川と考えられる大きな川跡が見つかっています。堤防は、この川の氾濫に備えて築かれたと思われます。水路は幅4m・深さ70cmあり、堤防上から転落した土器に混じって石釧(石で作られた腕輪の一種で、普通は古墳から出土します。)の破片が

出土しました。堤防上から大量の土器や石釧の出土したことは、ここで何らかの祭祀が行われたことを物語っています。

また、古墳時代の小さな堰(ダム)も見つかりました。この堰は、用水路をせき止め水田に水を引き込む役割をしていたと考えられます。堰には家の扉板などの廃材を利用して築かれたものと(写真12)、杭と木の皮を組み合わせて築かれたもの(写真13)があります。扉板は長さ1m以上、幅80cmもあり、当時かなり大きな家が建っていたことがうかがえます。

さらに、平安時代のものと思われる橋も2



写真11 堤防上からたくさんの土器が出土しました。



写真12 扉板を転用した堰(ダム)



写真13 写真12の下層でみつかった堰



写真14 林立する橋脚

カ所で見つかっています。もちろん、完全な姿で残っていたわけではなく、橋を支える支柱（橋脚）だけが、川に打ち込まれたままの状態で見られました。大きな方の橋は幅約1m、長さは13m以上あったと考えられ、使われている丸太の太さは30cm、長さは3m以上もありました（写真14）。

古墳時代～平安時代の水田の跡は、入佐川遺跡だけでなく袴狭遺跡からも広範囲にわた



写真15 畦に杭を打ち込んだ水田跡

って発見されています。

水田は分厚い砂に覆われており、激しい洪水に何度も襲われたことが分かりました。あたり一帯は現在でも、大雨があるとしばしば水田が水に浸かってしまいますが、^{あぜ}当時から続いている訳です。水害にあっても畔が簡単に流されてしまわないように、杭を畔の芯に打ち込んだものもいたる所でみられました（写真15）。

ここだけの遺物のお話

おお あし た げ た 大 足 と 田 下 駄

大足や田下駄は、水田に肥料となる草を踏み込んだり、ぬかるんだ水田に体が沈まないように履いたものです。これには板に鼻緒を通す穴をあけただけの簡単なものから、板と板を組み合わせて作ったものまで様々な種類があり、昔の人の知恵が忍ばれます。

右下の写真は^{たんとう}但東町民俗資料館に保管されている田下駄で、昭和の初めまで使われていました。数百年の時を隔てても同じ様な形をしていることには驚かされます。



袴狭遺跡の田下駄



入佐川遺跡の大足



最近まで使われていた田下駄

古代人の墓地

……カヤガ^{たに}谷遺跡……

小野川を南に見おろす山のなだらかな斜面には、たくさんの墓が作られていました。これらは、砂入遺跡や袴狭遺跡で紹介した祭祀の跡や役所の跡よりも少し前の弥生時代の終わり頃から奈良時代の初めの人々が葬られた墓です。

このころの墓というと土をこんもりと盛り上げて造ったものを想像しがちですが、ここでは棺を直接地面に埋めた木棺直葬墓^{もっかんじきそうぼ}と呼ばれるものや、板状の石を組み合わせて棺とした箱式石棺墓^{はこしきせつかんぼ}、山の崖面に洞穴を掘って棺を入れた横穴墓^{おうけつぼ}と呼ばれるものなどがみつっています。

木棺直葬墓や箱式石棺墓は、なだらかな尾根の上で30個所ほどがみつかりました(写真16)。

木棺直葬墓(写真17)は、棺の長さが6mもある大きなものから1m未満の小さなものまで、大小様々なものがありました。ほと

んどの墓には土器が供えられていました。また、壺を打ち欠いて枕としたものや、刀やガラス製の玉が供えられていた棺もあります。

箱式石棺墓は、山から切り出した厚さ約10cmの長方形の凝灰岩^{ぎょうかいがん}をうまく組み合わせて作られており、棺の長さは約160cm、幅は約30cmあります(写真18)。中には頭の向きを逆にした2体の人骨が腐らずに残っていました。

これらは弥生時代の終わり頃から古墳時代前半にかけての墓と考えられます。

横穴墓は小野川に面した崖に6個所造られていました(写真19)。穴の入り口は狭いのですが、奥に行くにしたがってだんだんと広くなり、死者を葬る部屋となっています。棺はすでに腐っていましたが、死者に供えた土器や刀などがたくさん残っていました(写真20)。この墓は、今から約1300年前に造られ始め、同じ墓穴を何回か利用しながら、その後約100年近く使われていたようです。

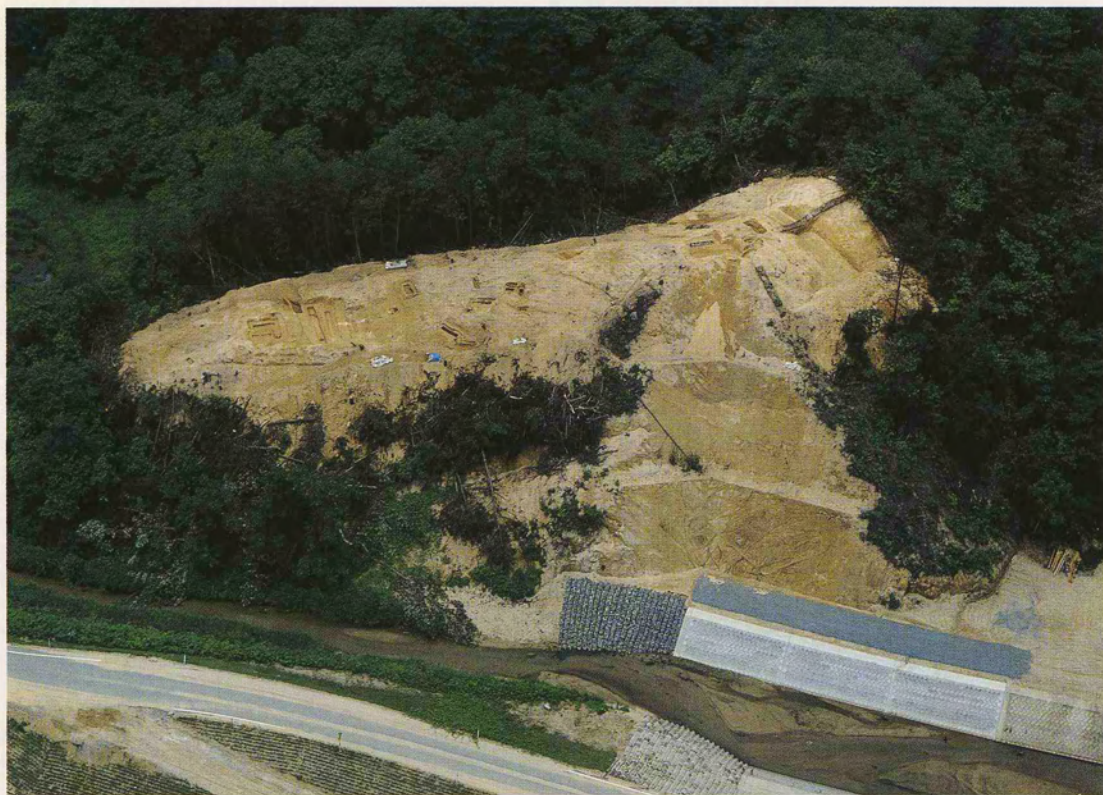


写真16 空からみたカヤガ谷遺跡(尾根上に墓が並んでいます)



写真17 木棺の痕跡。長さは6 mもあります。

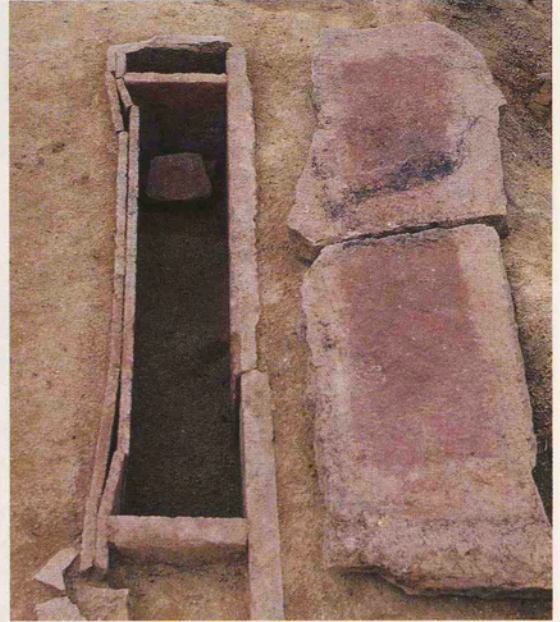


写真18 箱式石棺墓の蓋を開けたところ（出石町教委提供）



写真19 崖に開いた穴が
横穴墓です

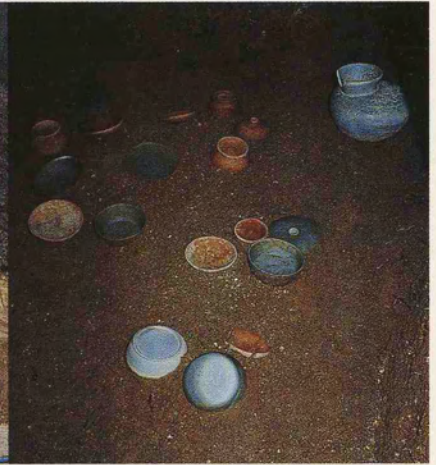
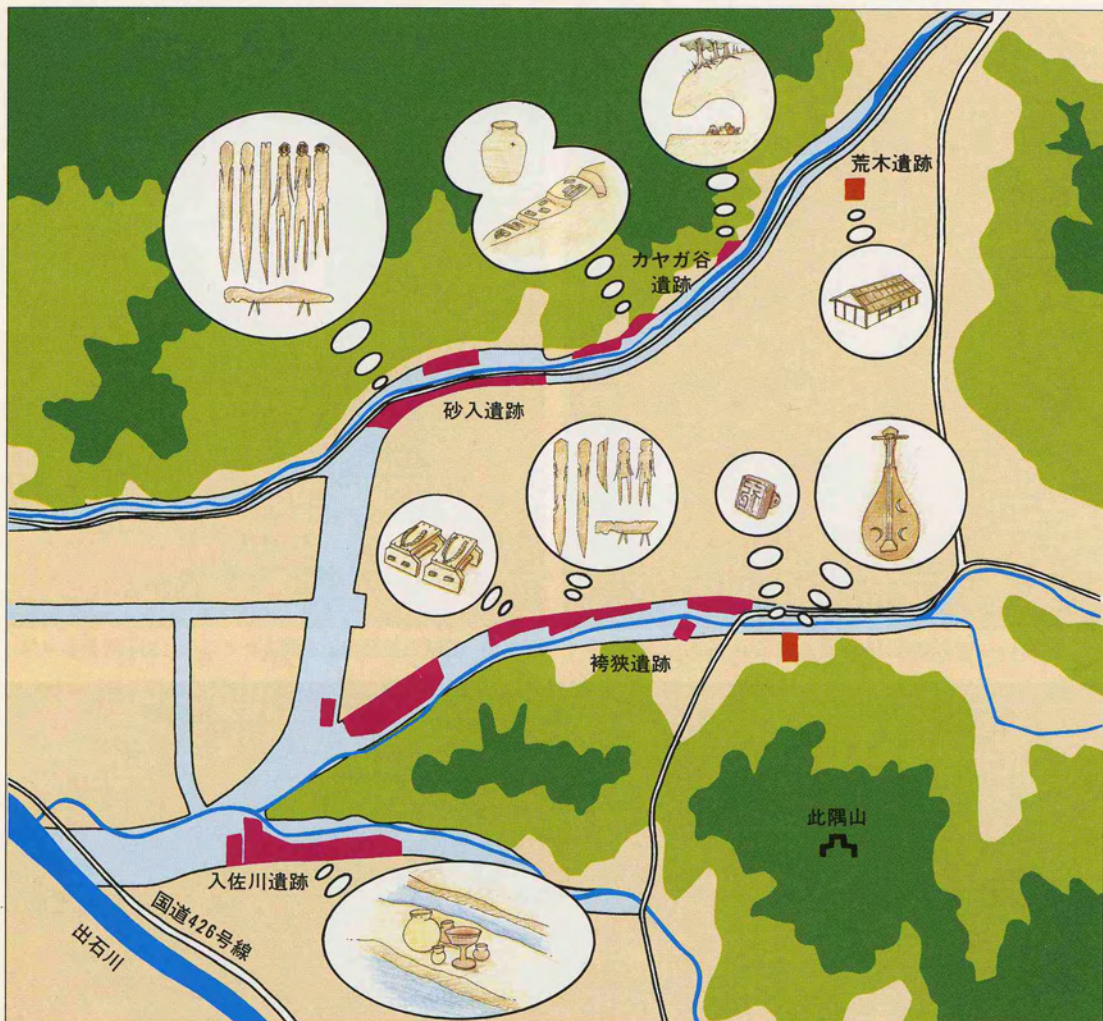


写真20 横穴墓内の
副葬品

また、近くからは越前焼の壺を納めた小さな穴が見つかりました(写真21)。室町時代のもので、壺の中には何も残っていませんでしたが、骨壺か、経典を納めた経塚と考えられます。県下で出土した越前焼は数少なく貴重な例です。



写真21 越前焼の壺



編集後記

今号では出石町で調査を進めている砂入・袴狭・入佐川遺跡を特集しました。特集に当たっては出石町教育委員会に写真の提供をはじめ多大な協力をいただきました。▷昭和62年に始めた発掘調査もはや7年が経過しました。その間、雪をかき分けながら調査を行ったことも一度や二度ではありませんが、ここに紹介したような大きな成果を挙げる事ができました。▷今年度もサケやシカが描かれた古墳時代の箱形木製品や室町時代のお堂跡など、貴重な発見が相次いでいます。これらについては今後引きつづき紹介しますのでご期待下さい。

